

【2】児童の実態

1. 学年別実態と障害別実態

小学部の児童を学年別で見ると表1のようであり、併せ持つ障害の実態で見ると、表2のようになる。(表2は延べ人数)

表1 学年別実態

学級	1組		2組		3組		合計
	1年	2年	3年	4年	5年	6年	
人数	2人	2人	2人	3人	3人	3人	15人

表2 併せ持つ障害の実態

ダウン症	6人	広汎性発達障害	1人
てんかん	4人	言語障害	9人
自閉症	2人	運動障害	2人
染色体異常	1人	視覚障害	2人

2. 発達検査による実態と自分づくりの段階

表3 新版K式発達検査の発達診断の結果

児童	学年	障害名	生活年齢	発達年齢				昨年度から	発達段階の推定
				全領域	姿勢・運動	認知・適応	言語・社会		
H子	5	てんかん	10:5	1:1	1:2	1:0	0:11	→	1歳前半群(自我の芽生え)
S子	1	染色体異常	6:2	1:10	1:8	1:9	2:1	—	1歳後半群(自我の誕生)
F男	3	自閉症	8:8	2:0	3:6	1:3	2:3	→	2歳児群 (自我の充実・拡大期)
N子	4	ダウン症	9:2	2:0	2:11	2:4	1:1	↑	
S男	2	ダウン症	7:11	2:3	2:4	2:5	2:0	↓	
I男	3	ダウン症	8:9	2:3	2:5	2:5	2:1	→	
O子	4	てんかん	9:10	2:8	2:3	2:5	3:1	↑	
Y男	2	ダウン症	7:2	3:0	2:11	3:6	2:4	↑	3歳前半児群(自我と自己主張の矛盾拡大期)
T男	5	ダウン症	10:9	3:3	3:6	3:5	3:0	↑	3歳後半～4歳群 (自制心の芽生え) (自制心の形成)
K男	5	てんかん	11:1	3:8	3:5	3:6	3:9	↑	
R男	6	ダウン症	11:9	3:8	3:6以上	3:11	3:5	—	
Y子	6	てんかん	11:4	4:3	3:5	4:0	4:6	↑	5歳児群 (自己客観視の芽生え)
N男	1	精神発達遅滞	6:5	5:0	3:5	5:4	4:5	—	
M男	4	広汎性発達障害	10:0	5:4	3:6以上	6:2	4:5	↑	
E男	6	自閉症	11:2	5:10	3:6以上	6:5	5:3	—	

* 検査は2001年5月に実施

* 全領域は認知・適応領域、言語・社会領域の得点から算出

新版K式発達検査の結果、小学部児童の15名は、1歳台から5歳台まで、幅広い発達段階にある。私たちは心の育ちに着目し、心の発達の過程を「自分づくり～他者との関係性における自我形成・自己形成の発達～」という指標でとらえ、まとめたのが次ページ「自分づくりの段階表」である。これには、その時期の内面的な特徴やその時期に大切にしたい支援のポイントを記している。ここでは、その一部を紹介する。

表4 自分づくりの段階表（一部抜粋）

		特 徴	大切なこと・支援	児 童
5 歳	自己客観視のめばえ	・「もっと～したほうがいい。だからがんばろう」と意欲を持ち、目標や期待に応えて力を発揮しようとする。・自分が外から見たらどうなるかというように視点を自分の外におく。見通しをもって行動し、活動が持続できる。	・間違いを指摘するより、自分の力で修正していけるように、悩みを聞き、活動のヒントを与えていく。・大きな目標を動機づけることで、集団のすばらしさを知る。	N 男 M 男 E 男
4 歳後半	自制心の形成	・ことばが行動を調整する。・一緒に遊ぶ友だちを求め、ごっこあそびが盛んになり、役割を果たすことに喜びを感じる。・理由が分かり大人の評価に従い行動する。	・自分を評価してくれる大人の前でコチコチになる時、無理に話そうとせず、友だちと話す機会をつくる。	
4 歳前半 3 歳後半	自制心の芽生え	・～してから～する心をもつ。・意図のもとに動作が次々と展開する。・年下の子のできることを一緒にしてやり、導くことができる。・大人になりたいと思う。	・じっくり待つて聞くようにする。・自分で最後までしたい願いを尊重して、支える。・緊張しないで会話ができる雰囲気をつくる。	K 男 R 男 Y 子
3 歳前半	自我と自己主張の矛盾の拡大	・大きい自分、賢い自分になりたい気持ちが「上手にできるかな」と葛藤を引き出し、苦手なことを感じとってしまう。・約束、信頼、説得がわかる。	・その子の得意なこと、好きなことでアピールする。・終わりよしの気持ちが持てるような舞台を演出する。	Y 男 T 男

2 歳後半（自我の充実）、2 歳前半（自我の拡大）、1 歳後半（自我の誕生）、1 歳前半（自我の芽生え）の内容については、別紙資料を参照。

3. 小学部の実態からの考察

- ・15 名の小学部の児童の発達段階は実に様々で、抱える障害も多様である。従って合同で学習していく際の学習内容や課題の設定、支援の方法については、担当する教員同士で十分に検討し、実践していく必要がある。
- ・1 歳台～2 歳台の自我の誕生から、自我の充実・拡大期の段階にある児童も半数おり、大人の関わり方や場の設定、支援の工夫が発達を促す大きな要因となる。教師自身が子どもたちの発達の要求を満たしていける、よき支援者でありたい。
- ・上の自分づくりの段階表からわかるように、小学部の児童にとって、その発達段階の特徴から「できないことをできるようにさせる教育」ではなく、できる状況づくりをすると同時に、「できることを使っていきいきと取り組み、できて自信をつける教育」が大切であることがわかる。
- ・6 年時になって地域の障害児学級から転入してきた児童や、1 年時において 5 歳台の発達段階にある児童など、子どもたちの実態は様々である。だからこそ、保護者の願いを始め、多くの情報や背景の記された「個別の指導計画」を参考にしながら、個々の課題を見つめた授業づくりが重要となる。

（小坂祥子）